

「当たり前」に潜む怖さ

看護大学教員 八田 冷子

ゆきさん、けいたさん、よしみさん、院生の皆様による貴重な講義ありがとうございました。それぞれの皆様のお話は短い時間でしたが、いろいろ考えさせられました。

特に、やえこ（樫木八重子）さんの「鍵付き抑制服」の話は、胸に突き刺さりました。30年以上前、私はその抑制服を家庭看護教室で、介護者に紹介していた保健師でした。

その頃は、その服が虐待にあたるなど夢にも思わず、ただ、ただ介護負担の軽減という観点から疑いもせず、まじめに行っていたのです。

ドイツの精神病院で、患者殺人という恐ろしいことが行われていたという環境を振り返る中で、その時は「まちがった事をしたとは思っていなかった」という看護職の話と同じ事だと改めて身につまされる思いでした。ひでさんの意見「情報が人を変える。情報が作った空気が人を変える」ということを体験したのだと思います。

私は今、この体験を看護学生に話しています。「患者の立場に立つ」ということはそんなに簡単な事ではなく、様々な観点から多面的に情報を分析していかないと「当たり前」と思って実行していたことが実は後になって全く患者の立場に立っていない事となる可能性があることを伝えています。

でも、「患者の立場に立って」様々な観点から多面的に情報を分析するためにどうしたらいいかというところまでには至っていません。先週の皆川先生の講義を聞き、病院内で感染症予防として当たり前のように着用されている「マスク」が、実は聴覚障害を持つ患者さんにとっては、コミュニケーションの大きな障壁になってしまうという事を何人の看護職が知ってその障害に応じた対応ができているだろうかと考えました。ゆきさんの講座は、文字通り、でんぐり返しの発想で当事者の声を聴き、他人ごとではなく自分事として考えることをじわじわと体感し、発想の転換につながるものだと感じています。

今回、けいたさんの臨床美術という世界を初めて知りました。どんな障害があってもその人自身が持つ力があり、「存在論的人間観」という概念は、これからの時代に本当に必要な考え方ではないでしょうか。

やまゆり園の施設建て替え問題に関連して、以前、ある障害児施設が建てかえられ視察に行ったことがありました。一見、きれいで、便利になり、子どもたちも安心して暮らせる環境のようでした。施設の理事長さんの趣味の絵画がところせましとかけられ、嬉しそうに得意げに案内されました。でもその施設の目下の悩みは、「この施設を出ていかなければならない年齢になった時に行き場がないから、障害者専用の高齢者施設が必要だということだ」と当たり前のように話されていた事を思い出しました。それが「隔離」という考え方から抜け出せない状況なのだという事をその環境にいる人たちは気づけない。

だからこそ、簡単に当たり前と思わず、今起きていることを自分事としてとらえ、一人ひとりの存在そのものが、世の中にとって大切な存在であり、どう生きたいのか、何をしたいのかということのを常に問い続けられる教育者となれるよう学び続けたいと思います。